

錦染滝白糸

——其一幕——

泉鏡花

青空文庫

場所。

信州松本、村越の家

人物。

村越欣弥（新任検事）

滝の白糸（水芸の太夫）

撫子（南京出刃打の娘）

高原七左衛門（旧藩士）

おその、おりく（ともに近所の娘）

撫子。なでしこ 円鬚まるまげ、前垂まえだれがけ、床の間の花籠はなかごに、黄の小菊はなごぎくと白菊の大輪おほなわなるを蒼つばみまじり投入いれにしたるを視ながめ、手に三み本もとばかり常夏とこなつの花を持つ。
かたわら 傍かたわらにおりく。車屋くるまやの娘。

撫子 今日——お客様がいらつしやるツて事だから、籠も貸して頂けば、お庭の花まで御無心して、ほんとうに済みませぬね。

りく 内の背戸にありますと、ただの草ツ葉なんですけれど、奥さんがそうしてお活いけなさいますと、お祭礼まつりの時の余所行よそゆきのお曠衣はれのように綺麗きれいですわ。

撫子 この細りほっそした、（一輪を指すゆびさ）絹糸のような白いのは、こ

れは、何と云う名の菊なんですか。

りく 何ですか、あの……糸咲いとざき々々つてお父さんとつがそう云いま
すよ。

撫子 ああ、糸咲……の白菊……そうですか。

りく そして、あのその撫子はお活けなさいませんの。

撫子 おお、この花は撫子ですか。（手なる常夏を見る。）

りく ええ、返り咲の花なんですよ。枯れた薄すすきの根に咲いて、珍

しいから、と内でそう申しましてね。

撫子 その返り咲が嬉しいうれしから、どうせお流儀があるんじゃないし、

綺麗でさえあればいい、去嫌さりきらい構わずに、根々《ねじめ》に

しましようと思つたけれど、白菊が糸咲で、私、常夏と覚えた
花が、撫子と云うのでしたら、あの……ちよつと、台所の隅へ
でも、瓶に挿しましよう。

りく そう、見つけて来ましよう。（起つ。）

撫子 （熟と籠じつなると手の撫子とを見較みくらぶ。）

りく これじやいかが。

撫子 ああ結構よ。（瓶にさす時水なし）あら水がない。

りく 汲くんで来ましよう。

撫子 いいえ、撫子なんか、水がなくなつて沢山なの。

りく まあ、どうして？

撫子 それはね、なんきんりゆう南京流の秘伝なの。ほほほ。（寂しく笑う）

。

おその、蓮葉はすはに裏口より入る。駄菓子屋の娘。

その 奥様。

撫子 おや、おそのさん。

その あの、奥様。お客様の御馳走ごちそうだつて、先刻さつき、お台所だいどころで、

魚のお料理をなさるのに、小刀ナイフでこしらえていらした事を、

私、帰つてお饒舌しゃべりをしましたら、お母つかさんが、まあ、何とい

うお嬢様なんだろう。どんな御身分の方が、お慰なぐさみに、お飯ままご

事ことをなさるんでも、それでは御不自由、これを持って行つて

差上げな、とそう言いましてね。(言いつつ、古手拭ふるてぬぐいを解ほどく)

いま研いだのを持って来ました。よく切れます……お使いなさ

いまし、お間に合せに。……（無遠慮に庖丁を目前めのさきに突出す

）。

撫子（ゾツと肩をすくめ、瞳ひとみを見据え、顔色かわる）おそのさ

ん、その庖丁は借かりません。

その ええ。

撫子 出刃は私たたに崇たるんです。早く、しまつて下さいな。

その 何でございますか、田舎もので、飛んだことをしましたわ。

御免なさい、おりくさん、お詫わびをして頂戴な。

りく お気に障りましたら、御勘弁下さいまし。

撫子 飛んでもない。お辞儀なんかしちやあ不可いけません。おその

さん、おりくさん。

りく　いいえ、奥様、私たちを、そんな、様づけになんかなさらないで、奉公人同様に、りくや。

その　その、と呼棄てに、お目を掛けて下さいまし。

撫子　勿もったい体ないわね、あなたがたはれつきとした町内の娘さん

じゃありませんか。

りく　いいえ、私は車屋ですもの。

その　親おやし仁は日傭ひようとり取の、駄菓子屋ですもの。

撫子　駄菓子屋さん立派、車屋さん結構よ。何の卑下する処があ

ります。私はそれが可うらやま羨しい。狗いぬの子だか、猫の子だか、掃は

溜きだめぐらいの小屋はあつても、縁の下なら宿なし同然。このお

邸やしきへ来るまでは、私は、あれ、あの、菊の咲く、垣根はばかさえ憚つ

て、この撫子と一所に倒れて、草の露に寝たんですよ。

りく あら、あんな事を。

その まあ……奥様。

撫子 その奥様と言われるのを、済まない済まない、勿体ない、

と知っていないながら、つい、浅はかに、一度が二度、三度めには

かすか 幽に返事をしていました。その罰が当たつたんです。いまの庖丁

が可おそろし恐い。私はね、なんきんでぼうち南京出刃打の小屋者なんです。

娘二人顔を見合わす。

まないた 俎きりきぎの上で切はりつけ刻まれ、磔はりつけにもかかる処を、神様のような旦那様

に救われました。その神様を、雪が積つて、あの駒こまヶ岳へあら

われる、清い気高い、白い駒、空におがんでいなければならな

いんだのに。女にうまれた一生の思出に、空耳でも、ひがみみ僻耳たしかでも、奥さん、と言われたさに、いい気になって返事をして、確たしかに罰が当たったんです……ですが、このまるまげ円鬚は言訳をするんじゃないかもしれません。一生涯ほかへはお嫁入りをしない覚悟、私は尼になった気です。……（涙ぐみつつ）もう、今からは怪我けがにだって、奥さんなんぞとおつしやるなよ。おりくさん、おそのさん、あらた更めてお詫をします。りく、それでも、やっぱり奥さんですわ。ねえ、おそのさん。その ええ、そうよ。

撫子 いいえ、いま思知ったんです、まったく罰が当たりますから、私を可哀想かわいそうだと思いなすったら、このお邸のおさんどん、

いくや、いくや、とおっしやつてね、豆腐屋、薪屋まきやの方角をお
 教えなすつて下さいまし。何にも知らない不束ふつつかなものですか
 ら、余所よその女中に虐めいじられたり、毛色の変つた見世物みせものだと、邸や
 しきまち
 町ほの犬に吠えほられましたら、せめて、貴女あなた方が御鼻ごひいき尻しに、
 私かばを庇つて下さいな、後生ですわ、ええ。

その 私どうしたら可いいでしょう——こんなもの、掃溜うっちゃへ打棄ちや
 つて来るわ。(立つ。)

撫子 ああ、靴の音が。

りく 旦那様のお帰りですね。

村越欣弥むらこしきんや。高原七左衛門たかはらしちざえもん。登場。道を譲る。

村越 ま、まあ、御老人。

七左 いや、まず……先生。

村越 先生は弱りました。(忸怩たり)では書生流です、御案内。

七左 その氣象！ その氣象！

撫子。出迎えんとして、ちよつと鬚に手を遣り、台所へ下らんとするおりくの手を無理に取つて、並んで出迎う。

撫子 お帰り遊ばせ。

村越 お客様に途中で逢つたよ。

撫子 (一度あげたる顔を、黙つてまた俯向き、手をつく。)

七左。よう、という顔色にて、兀頭の古帽を取つて高

く挙げ、皺だらけにて、ボタン二つ離れたる洋服の胸を反らす。太きニツケル製の時計の紐がだらりとあり。

村越 さあ、どうぞ。

七左 御免、真平御免。まっぴら

腰を屈かがめ、摺すり足あしにて、撫子の前を通り、すすむる蒲団ふとんの座に、がつきと着く。

撫子 ようおいで遊ばしました。

七左 ははつ、奥さん。(と倒さかさになる。)

撫子 (手を支つかえたるまま、つつと退すさる。)

村越 父、母の御懇意。伯父さん同然な方だ。——高原さん……

それは余所よその娘です。

七左 (高らかに笑う) はツはツはツ、いづれ、そりや、そりや、いづれ、はツはツはツはツ。一度は余所の娘御には相違ないて

な。いや、ばばあ婆どのも、かげながら伝え聞いて申しておる。村越の御子息が、ま目のあたり立身出世は格別じや、が、なかんずく就中、えら豪いのはこの働きじや。万一この手廻しがのうてみさつしやい、かじ団子噛るにも、蕎麦を食うにも、以来、欣弥さんの嫁御の事で胸が詰る。つましかる処へ、おくがたづれ奥方連のお乗込みは、これは学問修業より、やりさき槍先の功名、と称えて可い、よとこう云うてな。

この間に、おりく茶を運ぶ、がぶりとのむ。

はツはツはツはツ。

撫子弱っている。

村越 (額に手を当て) いや、召使い……なんですよ。

七左 いずれそりや、そりやいずれ、はツはツはツ、若いものの

言う事は極きまつておる。——奥方、気にせまい。いずれそりや、
 どんそかしてうずらとなる すずめかいちゆうにいってはまぐりとなる
 田鼠化たね為鶉うずら、雀入海すずめ中かいちゆう為蛤いってはまぐり、とあつてな、
 召つかいから奥方になる。——老人田舎ものののしようがには、
 山の芋ほを穿うなぎつて鰻とする法を飲込んでゐる。拙せつ者、足軽で
 はござれども、(真面目に)松本の藩士、士族でえす。刀に掛
 けても、追おつつけ表おもてむき向の奥方にいたす、はッはッはッ、——
 これ遁にげまい。

撫子、欣弥の目くばせに、一室ひとまにかくる。

欣弥さんはお奉行様じゃ、むむ、奥方にあらず、御台所みだいどころと申
 そうかな。

撫子 お支度が。(——いい由よし知らせる。)

村越 さあ、小父さん、とにかくあちらで。何からお話を申して
可よいか……なにしろまあ、那室あちらへ。

七左 いずれ、そりや、はッはッはッ、御馳走には預るのじや、
はッはッはッ。遠慮は不沙汰ぶさた、いや、しからば、よいとまかせ
のやつとこな。(と云つて立つ。村越に続いて一室ひとまに入らんと
して、床の間の菊を見る) や、や、これは潔さわやかく爽さわやかじや。御主人
の氣象によく似ておる。

欣弥、莞爾にっこりして撫子の顔を見て、その心づかいを喜び謝す。
撫子嬉しそうに胸を抱く。

二人続いて入る、この一室襖ふすま、障子にて見物の席より見えず。
七左 (襖うちの中にて) ここはまた掛花活かけばないけに山茶花さざんかとある……紅あか

いが特に奥方じやな、はッはッはッ。

撫子、勝手に立つ。入いれかわりて、膳部ぜんぶ二調、おりく、おその二人にて運び、やがて引返す。

撫子、銚子ちようし、杯洗はいせんを盆にして出で、床なる白菊を偶ふと見て、空瓶あきびんの常夏に、膝をつき、ときの間にしほみしを悲かなむ状さまにて、ソと息を掛く。また杯洗を見て、花を挿直し、猪口ちよくにて水を注つぎ入れつつ、ほろりとする。

村越 (手を拍たたく。)

撫子 はい、はい。(と軽く立ち、襖に入る。)

七左、程もあらせず、銚子ちようしを引ひ攫つかんで載せたるままに、一ひと人前とりまえの膳を両手に捧げて、ぬい、と出づ。

村越 (呆れたる状あきして続さまく) 小父さん、小父さん、どうなすつた……どうなさるんです。おいくさん、お前粗相そそつをしやしないかい。

七左 (呵から々と笑からう) はッはッはッ。慌てまい。うろたえまい。騒ぐまい。信濃国東筑摩郡しなののくにひがしちくまこおり 松本中が粗相をしても、腹を立てる私わしではない。証拠を見せよう。それこれじゃ、(萌黄古もえぎびて茶となりたるに大紋の着いたる大風呂敷を拵ゆげて、膳を包む)——お銚子は提げて持つて行くわさ。

村越 小父さん！

七左 慌てまい、はッはッはッ。奥方もさて狼狽うろたえまい。騒ぐまい。膳おつは追おつて返す。狂人きちがいじみたと思わりようが、決してそう

でない。実は、婆々ばばどのの言うことに——やや親仁おやじどのや、ぬしは信濃国東筑摩郡松本中での長尻ながちりぞい……というて奥方、農産会に出た糸瓜へちまではござらぬぞ。三杯飲めば一いつとき時じや。今の時間ときで二時間かかる。少い人わかたち二人の処、向後はともあれ、今日ばかりは一杯でなしに、一口呑のんだら直ぐに帰つて、意気な親仁になれと云う。の、婆々どののたつての頼みじや。田鼠化為鶉、親仁、すなわち意気となる。はッはッはッ。いや。当こ家ちうのお母堂ふくろさま様も御存じじやつた、親仁こういう事が大好きじや、平ひらに一番遣ひとつらせてくれ。

村越 (ともに笑う) かえつてお心任せが可いでしょう。しかし、ちようど使つかのものもあります、お恥かしい御膳ですが、あとか

ら持たせて差上げます。

撫子 あの、赤の御飯を添えまして。

七左 過分でござる。お言葉に従いますわ。時に久しぶりで、ちよつと、おふくろ様に御挨拶ごあいさつを申したい。

村越 仏壇がまだ調いません、位牌いはいだけを。

七左 はあ、香花こうげ、お茶湯ちやとう、御殊勝ごじゆせうでえす。達者でござつたらばなあ。

村越 (涙ぐむ。)

七左 おふくろどの、主ぬしがよくな後生の好人いいひとは、可厭いやでも極楽。……百味の飲食おんじき。蓮はすの台うてなに居すくまつては、ここに(胃をたく)もたれて可ようない。ちと、腹はらごなしに娑婆しやばへ出て来て、

嫁御にかき餅でも焼いてやらしやれ。(目をこすりつつ撫子を
見る) さて、ついでに私の意気になつた処を見され、御同行
の婆々どのの丹精じや。その婆々どのから、くれぐれも、よろ
しゅうとな。いやしからば。

村越 (送り出す) 是非近々に。

七左 おんでもない。晩にも出直す。や、今度は長尻長左衛門
じやぞ。奥方、農産会に出た、大糸瓜の事ではない、はッはッ
はッ。(出て行く。)

村越座に帰る。

撫子 (鬢びんに手をあて、悄しおれて伏す) 旦那様、済みません。

村越 お互の中にさえ何事もなければ、円鬻まげも島田も構うものか。

この間に七左衛門花道の半ばへ行く、白糸出づ。

白糸 (行違ひ、ちよつと小腰) あ、もし、旦那。

七左 ほう、私かの。

白糸 少々伺いとう存じます。

七左 はいはい。ああ何なりとも聞くが可い。信濃国東筑摩郡松本中は鶉でござる。

白糸 あの、新聞で、お名前を見て参つたのでございりますが、この御近処に、村越さんとおつしやる方のお住居を、貴方、御存じではございませんか。

七左 おお、弥兵衛どの御子息欣弥どの。はあ、新聞に出ておりますか。田鼠化為鶉、馬丁すなわち奉行となる。信濃国東筑

摩郡松本中の評判じや。唯^{ただいま}今、その邸から出て来た処よの。

それ、そこに見えるわ、あ、あれじや。

白糸 ああ、嬉しい、あの、そして、欣弥さんは御機嫌でございますか。

七左 壮健^{たつしや}とも、機嫌は今日のお天気です。早う行つて逢い

なさい。

白糸 難^{ありがと}有う、飛んだお邪魔を——あ、旦那。

七左 はいはい。

白糸 それから、あの、ちよつと伺いとう存じますが、欣弥さんは、唯今、御家内はお幾^{いくたり}人。

七左 二人じやが、の。

白糸 お二人……お女中と……

七左 はッはッはッ、いずれそのお女中には違くない。はッはッはッ。

白糸 (ふと気にして) どんなお方。

七左 どんなにも、こんなにも、松本中での、あでやかな奥方じや。

白糸 お家うちが違やしませんか。

七左 村越弥兵衛どの御子息欣弥殿。何が違う。

白糸 おや、それじゃ私の生いきり霊ようが行つてるのかしら。

七左 ええ……変なことを言う。

白糸 見て下さい、私とは——違いますか。

七左 いや、この方が、床の間に活いけた白菊かな。

白糸 え。

七左 まずおいで。(別れつつ) はあてな、別べっぴん嬪二人二千石、

功名々々。(繻しゆす子の洋傘こうもりを立てて入る。)

白糸 (二三度ていかい 徊して、格子にかかる) 御免なさい。

これよりさき、撫子、膳、風呂敷など台所へ。欣弥は一室に
入いり、撫子、通かよいぼん盆ひとを持って齊しく入る。

その (取次ぐ) はい。

白糸 (じろりと、その髪かみかたち容ながを視ながむ) 村越さんのお住居すまいはこ

ちらで?

その はい、どちらから。

白糸 不案内のものですから、お邸が間違えますと失礼です。この村越様は、旦那様のお名は何とおっしゃいますえ。

その はい、お名……

云いかけて引込ひっこむと、窺うかがいたる、おりくに顔を合せる。
りく 私、知っててよ。（かわって出づ）いらっしやいまし。

白糸 おや。（と軽く）

りく あの、お訊たずねになりました、旦那様のお名は、欣弥様でございますの。

白糸 はあ、そしてお年とし紀は……お幾つ。

りく あのう、二十八九くらい。

白糸 くらいでは不可いけませんよ。おんなじお名でおんなじ年くら

いでも……の、あの、あるの、とないの、とは大変、大変な違いなんですから。

りく あの、何の、あるのと、ないのと、なんです。

白糸 え

りく 何の、あるのと、ないの、とですか？

白糸 お髻ひげ。

りく ほほほ、生やしていらっしやるわ。

白糸 また、それでも、違うと不可いけない。くらいでなし、ちゃんと、

お年紀を伺いとうござんすね。

りく へい。

げげんな顔して引込むと、また窺いたる、おその、と一所

に笑い出して、二人ばたばたと行つて襖際へ……声をきき知る表情にて、衝と出づる欣弥を見るや、どきまぎして勝手へ引込む。

村越。つつと出で、そこに、横を向いて立つたる白糸を一目見て、思わず手を取る。不意にハツと驚くを、そのまま引立つるがごとくにして座敷に來り、手を離し、とすわり、一あしよろめいて柱に凭る白糸と顔を見合せ、思わずともに、はらはらと泣く。撫子、襖際に出で、ぼったり通盆を落し、はつと座ると一所に、白糸もトンと座につき、三人ひとしく会釈す。

欣弥、不器用に慌しく座蒲団を直して、下座に來り、無理に

白糸を上座じょうざに直し、膝を正し、きちんと手をつく。

欣弥 一別以来、三年、一千有余日、欣弥、身体、髪膚はつぷ、食あり
生命あるも、一いつにもつて、貴女の御恩……

白糸 (耳にも入らず、撫子を見詰む。)

撫子 (身を迂すべらして、欣弥のうしろにちぢみ、齊ひとしく手を支く
。)

白糸 (横を向く。)

欣弥 暑いにつけ、寒いにつけ、雨にも、風にも、一刻もお忘れ
申した事はない。しかし何より、お健すこやかで……

白糸、横を向きつつ、一室の膳に目をつける。気をかえ煙草たばこ
を飲まんとす。火鉢に火なし。

白糸 火ぐらいおこしておきなさいなね、芝居をしていないでさ。
 欣弥 (顔を上げながら、万感胸に交々こもこも、口吃きつし、もの云うあ
 たわず。)

撫子 (慌あわただしく立ち、一室なる火鉢を取って出づ。さしよりて)

太夫さん。

白糸 私は……今日は見物さ。

欣弥 おい、お茶を上げないかい。何は、何は、何か、菓子は。

撫子 (立つ。)

白糸 そんなに、何も、お客あつかい。敬して何とかってしなく
 っても可ようござんす。お茶のお給仕なら私がするわ。

勝手に行くゆふり、颯さつと羽織を脱ぎかく。

欣弥 飛んでもない、まあ、どうか、どうか、それに。

白糸 ああ、女中のお目見得めみえがいけないそうさ。それじゃ、私帰ります。失礼。

欣弥 (笑う) 何を云うのだ、帰ると云つてどこへ帰る。あの時、長野の月の橋で、——一生、もう、決して他人ではないと誓つたじゃないか。——此家ここへ来てくれた以上は、門も、屋根も、押入も、畳も、その火鉢も、皆みんな、姉ねえさんのものじゃないか。

白糸 おや、姉さんとなりましたよ。誰かに教おそわつたね。だあれかも、またいまのようない口に——欣さん、門も、屋根も押入も……そして、貴女あなたは、誰のもの？

欣弥 (無言。)

白糸 失礼！（立つ。）

欣弥 大恩人じゃないか、どうすれば可い。お友さん。

白糸 恩人なんか、真ツ平です。私は女中になりたいの。

欣弥 そんな、そんな無理なことを。

撫子 太夫さん。（間）姉さん、貴女は何か思違いをなすつてね。

白糸 ええ、お勝手を働こうと思違いをして来ました。（投げた

ように）お目見得に、落第か、失礼。

欣弥 ええ、とにかく、まあ、母に逢つて下さい、お位牌いはいに逢つ

ておくれ。撮写うつすのは嫌だ、と云つて写真はくれず、母はね、い

まわの際まで、お友さん、姉さま、と云つてお前に逢いたがつ

た。（声くもる）そして、現うつつに、夢ゆめごころ心に、言いあてたお前

の顔が、色艶いろつやから、目鼻立まで、そっくりじゃないか。さあ。

(位牌を捧げ、台に据う。)

白糸

(衣紋えもんを直し、しめやかに手を支つかう) お初に…… (おなじ

く声を曇らしながら、また、同じように涙ぐみて、うしろについて居る撫子を見て、ツツと位牌を取り、胸にしかと抱いて、居直しつて) お姑しゅうとさん様、おつかさん、たとい欣さんには見棄てら

れても、貴女にばかりは抱だきついて甘えてみとうござんした。おつかさん、私や苦勞をしましたよ。……御修業中の欣さんに心配を掛けてはならないと何にも言わずにいたんです。窶やつれた顔を見て下さい。お友、可哀想に、ふびんな、とたつた一ひとこと言。

貴女がおっしゃって下さいまし。お位牌を抱けば本望です。

(もとへ直す) 手も清めないで、失礼な、堪忍して下さい。心が乱れて不可いけません。またお目にかかります。いいえ、留めないで。いいえ、差当った用がござんす。

思切りよくフイと行くを、撫子あわただ慌すしく縫とどつて留む。白糸、美しき風のごとく格子を出でてハタと鎖とぎす。撫子指を打つて悩む。

欣弥 (続いて) 私は、俺おれは、婦おんなの後へは駈かけ出せない、早く。

撫子 (ややひぞる。)

欣弥 早く、さあ早く。

撫子 (門かどを出で、花道にて袖を取る) 太夫さん……姉さん。

白糸 お放し!

撫子

いいえ。

大正五（一九一六）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：忠夫今井

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錦染滝白糸

——其一幕——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>